

我が古代國民の自覺

文學博士 岡田正之

古代といふのが推古朝から奈良朝の終りまでを指して置く積りでございます。此時代といふものは御承知であらせられる如くに支那の南北朝、隋唐の新しい文化が我國に入込んで來ましたのでありまして、當時我國國民殊に上流知識階級の人々は此新文化に對して如何なる態度を取つて居つたかといふことを見ますと、其處に餘程國民的自覺の現れて居る所があるかのやうに認めて居るのであります。其處を實は少しばかり申上げて見たい考であります。普通に南北朝隋唐の文化が入るに就きましたは我國では其新しい文化に憧れまして崇拜となり心酔となりまして國体をも顧みず我民俗をも考へずして一から十まで翻譯的に或は摸倣的に採つて我國の文化を拵へたかのやうに考へて居る人も往々あるやうであります。それは非常な誤謬であると存するのであります。當時の上流知識階級の人々を見ますと、我國といふことを始終念頭に置いて決して自分といふものを没却して居るといふやうなことはなかつたやうに見受けられるのであります。其我國といふ考を以て新文化に接しましたことは色々澤山にあらうと存じます。が、今夕は四つ位のことを申上げたい、第一は外交の上に於て、第二は法制の上に於て、第三

には學問の上に於て、第四には思想の上に於て、此四つに對しまして先づ文書それから法令或は詩或は歌、或は文章といふものを根本史料と致しまして、當時の國民の自覺の史實を擧げて見たいと思ふのであります。

それで先づ第一は外交上に於てといふのでありますが、支那の古い時分から我國の往來交際して居ることは支那の歴史それから我國史等に見えて居りまするのであります。餘程由つて來る所は遠いのであります。併し往復文書の上に現れましたのは雄略帝の御宇で支那の方では南北朝の宋でございませう。宋の順帝といふ天子の時に、此方から遣りました文書が残つて居るのであります。それは梁の沈約の編修しました宋書に載つて居ります。恐らくは日本から支那へ遣りました手紙の中では最も古いものであらうと思ふのであります。其文章は立派な文章でありまして、支那人も及ばぬ位に出來て居るのであります。勿論是は前に申しました宋書を編修した沈約は有名な文章家でありませうから、幾分かは直した處もあらうと存せられますが、全然拵へたものではないのであります。其證據に當時宋に來た諸國の手紙と日本のと比較すると自ら異なつて居るのでありますから、全く日本から遣つた手紙を幾分の潤色を加へたものであつたらうと思ふのであります。日本の文章で申しますと丁度日本書記の文章に能く似て居ります。日本書記に見ゆる詔勅其他朝鮮半島へ遣された書などの文は孰れも名文が多うございませうが、其等の文と能く似て居ります。これが若し日本書記の中にあつたならば或る一派の學者から日本

書記編纂者の筆であると云はれるであらうと存じます。それは文章の御話を致したのでありますが、ここで此文は誰が書いたものであるかといふことが餘程疑問でありまして、當時は御承知の通り大抵文章のここを取扱つて居ります者は朝鮮若くは支那から歸化した種族であつたのであります。恰も足利時代に於ける文章又は交通のことを取扱つたのが五山の僧侶であつたといふのと同じやうであります。足利時代に幕府から明に遣つた手紙は盡く五山の高僧の手に成つて居るのであります。それと同じやうに古い雄略帝時分の支那に遣つた手紙は全く歸化種族の手に出來たもので、此宋書に遺つて居ります手紙も矢張歸化種族の起草したものであらうと思ひます。國史に有名な久米博士の意見では當時歸化した史部の身狹青、檜前博徳の手に成つたものであらうといつて居られますが、或はさうであらうと思ひます。然らば其手紙は何處から出たかといふと、其文に據れば和國王武が宋の順帝に遣したことになるのであります。其和國王武といふのは誰のことであるかといふと、それは日本異稱傳を著しました松下見林や漢籍倭人考を書きました菅政友などの意見では雄略天皇のことを申し奉つたものである、雄略天皇は大泊瀬幼武と仰せられましたから、幼武の武の一字を取つたものであるといふ考になつて居るのであります。果して此説の如くとしますと、我朝廷から御遣しになつた國書になるのであります。ところがどうしても其文章の内容を見ますと甚だ大義名分を誤つて居る、我國体を没却した書き方でありまして、恰も宋の屬國でともあるかのやうな文の書き様になつて居るのであります。それ故本居宣長は邊土の豪

族又は韓地在住の鎮尉の遣つたものであらうといひ、鶴峯戊申は熊襲の國號を僭せしものより贈つたのであらうと申してゐます。此兩説もどうであらうか、感心出来ません。自分の考では朝廷から御遣しになつたものであらうが、其文は歸化人が祖國の皇帝に贈る書ですから斯ういふ名分を誤つた譯で、而かも朝廷の御諒解をも得ずして直に贈つたものであるまいかと思ふのであります。果してさうであるとすれば國民的代表の國書とすべきものでない。外交文書としては古いに相違ない、文學史上餘程珍重すべきものであるけれども、唯今申す意味から申しますと、どうも眞の國書といふことは出来ないと思へますから、是は古いものであるけれども例にならないといふことを申上げたに過ぎませぬ。して見れば外交上古い國書としては推古朝の時に始を置かなければならぬと思ひます。

御承知の通り推古帝の時に小野妹子を支那に御遣しになりました。丁度隋の煬帝の時代でございました。隋の方では小野妹子を裴世清といふ者を附けて日本に送り届けました。すると我朝廷に於かれまして裴世清を送還する爲に再び小野妹子を遣はされたのであります。此時に兩國に交換された書が我國書として最も古く最も貴きもので最も國民的自覺を現はして居るものと思ふのであります。それで此時の國書は二通ございます。唯今申しました通り初めに小野妹子が参りました時のと後に参りました時のと二通であります。第一回に御遣しになつた國書は隋書若くは北史に載つて居て日本書記には見えて居ないのであります。第二回に御遣しになつた國書は日本書記には見えて居りますが、隋書や北史には見

えて居ないのであります。さういふ風に兎に角兩方の歴史に一つづつ遺つて居つたのでございます。第一回は有名なもので、

日出處天子、致書日沒處天子。無恙。云々。

とあります。之に對する隋の煬帝の返書がございます。是も日本書記に在つて、隋書にはありません。其書出しは、

皇帝問皇倭。云々。

といふのでございます。之に對する國書は即ち第二回に分であります。其書出しは、

東天皇敬白西皇帝。云々。

とあります。之に就て申し上げたいと思ひますのは第一回の國書の文は文の起し始めが實に雄大な所があるやうに思ふのであります。日出づる所の天子が書を日沒する所の天子に致すといふ、日出と日沒とを以て對し來つて對等といふことより寧ろ對等以上の地位を占めて居られるやうな御言葉に見えるのであります。是れは有名な聖德太子の御筆といふことに古來から言傳へになつて居りますが、成程さうであらうかと思はれます。立言の體は全く對等若くは對等以上の精神を以て書かれてある處は、聖德太子のやうな智徳の優れた御英邁の方でなくては出来ないことゝ恐察します。ところで隋の煬帝が此國書を覽て無禮として悦ばなかつたといふことが隋書に見えてゐます。さうでせう、煬帝といふのは當時餘程大き

な仕事をした雄才大略の帝王であります。然るに今や小ぼけな日本あたりから寄越しました手紙にして斯の如き言葉が使つてありますから悦ばなかつたのは無理はない。經籍後傳記に據りますと「隋煬帝覽之不悅、猶怪其意氣高遠、遣裴世清等十三人、送因高、來觀國風」とあります處を見ますと、煬帝も不愉快に思ひまする中にも文章の意氣高遠なることを不思議に思ひ好奇心を起し、更に日本に書を寄越した譯になつて居ります。惜しいことには此國書の文化が全部ない事であります。若し此後の句があつたらどんなに莊重偉大であつたらうかと書出の文で想像されるのであります。隋書に削つて載せなかつたことは誠に残念に思ふのです。是は餘談になりますが、國書の文に無恙の語を用ふるは漢以來の慣例の文句でございます。此處に一例だけを持つて來ましたが、是は前漢時代に匈奴から漢の天子に贈つた時の手紙であります。

天所立匈奴大單干。敬問皇帝。無恙。

大抵恙無きやといふことを書くのです。漢から匈奴へやりますにも匈奴大單干に問ふ恙なきやといふことは當時の國際上の慣例の言葉であるものと思ひます。而して其上に斯ういふ形容詞を附けるといふことも慣例である。天の立つる所の匈奴の大單干と書いてある。思ふに聖德太子の此國書を御書きになつた時分には餘程支那の例を深く御調べになつて慎重に御考への上出來たもので決して輕々に御書になつたものでないと思ひます。是れも餘程でございますが、日没の國といふことは奈良朝時代の歌に見え、萬

葉集の天平五年贈入唐使歌に「日入るの國に遣はさる」とあります。して見ますと隋唐を指して日没處と呼んだのは、聖德太子に始まりて奈良朝に言ひ傳へたものと見えます。今一つ附なりに申しますが、後漢書の南夷傳に遠夷慕德の歌を譯載されてあります。其の歌は

蠻夷所處。日入之化。慕義向部。歸日出主。

といふのであります。日出日入を以て彼我の國を表したことは餘程よく似てゐます。御起草の際には、或は斯ういふ所も幾分か御參考になつて居るのではなからうかとも考へるのでございます。第二回の國書も聖德太子の御筆であること經籍後傳記などの説であります。其書出しには「東天皇敬白西皇帝」とありて措辭は極めて穩なものであります。其御精神は第一回の國書と同じく對等國の態度度あつて決して前申しました雄略帝時代の手紙であるとか、足利時代に幕府の命を受けて明の朝廷へやりました手紙などとは立言の体になつて居るのであります。全く對等國の態度を以て書かれたものであると思ふのであります。斯ういふ次第であります。兎に角推古朝時代から餘程自覺心が上流知識階級の間に取りまして、而して遂に發して斯の如き國書にもなつたものであらうと存するのであります。外交文書の上から見たる自覺といふことは即ち此事でございます。それから第二は制度の上になつてといふのであります。是は極めて有觸れた話であります。其中に少しばかり自分の新に考へたこともありますから申上げて御批評を仰ぎたいと思ふのであります。

唯今申す如くに推古朝以來は隋唐との往來は烈しくなり、大化の革新も起つて來ましたので、もう總て隋唐の新しい文化といふものを吸収するのに汲々乎として居るといふやうな状態であつたのでございます。それでございますから律令格式などいふものも全く其一つであつて隋唐あたりの文化に接觸した結果として出來た品物でございます。ところで律令格式といふものを選定さるる間にも其局に當つた者は我國といふことを念頭から去られなかつたことと思ひます。今夕は令の一つの或部分に就て其實例を申上げて見たいと思ふのであります。唯今遣つて居ります令は即ち養老令でありますが、養老令と申しますものは近江朝の時分から出來て來て養老令となるのでありますから、近江朝からの制度として然るべきものと思ふのであります。其養老令を見ますと職員令の劈頭の所に神祇官といふものを置いてある。是は唐の制度に於ては見ることは出來ない。それからしまして其神祇官の次は太政官を置いてあります。是等も矢張り唐とは餘程違ふのでございまして、太政官には太政大臣といふものがあつて、諸政を統べ、其下に左大臣と右大臣がある、其次に大納言があり其次に右辨官と左辨官とある、斯ういふやうな太政官の官制になつて居るのであります。ところが唐の方では決してさういふものはないのです。唐の方では中書、尙書、門下といふ三省に分たれ、それが日本の太政官に當るものになるのです。全然唐の官制と日本の官制といふものとは組織を異にして居るといつて宜からうと思ふのである。又日本の方には中務省とか大藏省とか民部省とかいふ八省がございしますが、此八省といふものは唐の六

部に當るのであります。餘程其處も違つて居るのです。即ち中務省は唐では三省の一であります。日本では、八省の中に這入つてしまつて居る。それからしまして日本の大藏省に當るのを求めて見ますと六部の中に無くて九寺といふ中の大府寺といふものが、それでありますから、大藏省の位置も唐では餘程卑い役所になつて居るのです。世間では往々我官制は、隋唐の制度を其儘採つて減らしたり殖したりしたといふ人がありますが、私は全然日本は日本といふ國の上から其官制を組立てたものである、故に斯んなに唐と日本と違ふのであるといふことがいへると思ふのであります。若し翻譯的のものであるならば全く支那と同じものでなければならぬのであります。前申上げました通り總て異なつて居りますから、唐と組織を異にして居るといふ方が、適當であると思ふのであります。今一つ實例を申上げてみたい。一體唐令といふものは滅びてしまつたのでありますから、明確に日本の養老令に對照比較すべきことが出來ないのであります。併し今日傳はつて居る唐の六典には唐令の部分が餘程残つて居ることは古人も論じて居りますから、試に六典と養老令との考課に關することを比較して見ませう。考課といふのは役人の成績を調べることでありまして、其令に最條といふものがございます。最條といふのは各官職の勤務しました其成績の最上等の標準を示したもので、其文は毎條四字づゝの二句で出來てゐる。例へば「戸口不濫、倉庫有實、爲民部之最」と斯ういふ體裁であります。ところで最條の簡條の數を比較して見ますと、唐の方は二十七簡條であつて我養老令にありませう。所は四十二簡條であります。餘程我

國の最條は唐よりは多いのであります。一體官職の上からいつたならば唐の方が官職が多いのでありますから、最條も唐の方が多かりさうなものであるに拘らず日本の方が多數を占めて居る。而して文章は唐の文章を直に翻譯的に持つて來たのではないのでございまして、其統計を取つて見ますると支那のは前申します通り二十七條、日本の方は四十二條でございしますが、其中で兩方二句同じものを比較すると十七箇條は上の句も下の句も二句とも同じで、一句同じのが三箇條で其あとは全然日本で作つたものであります。此の通り考課令の最條の所を見ても我國のと唐令とは相違して居るのでございします。是は餘程深く日本の國俗人情といふことが當時の立法者の頭にあつたものでありますから、それで斯ういふ相違を來したものであらうと思ふのであります。今一つ違つたものを申せば、人を官に就ける選叙令といふものがあります、養老令中の選叙令を見ますと人を官に就けるには四つの種類の試験がありました。それは秀才と明經と進士と明法といふ此四科であります。此四課を以て試験することは唐の制度と同じであります、修學の程度などは矢張違つて居ります。例へば進士は唐の方では「明時務。精熟一經者、爲進士」とあります。ところが日本の方は「進士取明時務、并讀文選爾雅者」とあります。唐の方は時務に習ふ外に、一經に精熟したものとし、日本の方は時務の外に爾雅と文選とを讀むものとしてある。此通り試験の程度が變つて居ります。今一つ爰に面白く思ひますのは秀才や明經や進士や明法の試験の及第の附加條件としては是非とも斯ういふことがなければならぬといふことになつて居る

のであります。「皆須方正清修、名行相副」といふことが書いてあります。兎に角四科の學科が通つても其人の素行が宜しくなかつたならばそれは逆もいかない、どうしても素行も方正清修にさうして其人の名譽と實行と相適ふやうなものを採らなければならぬ。是は唐の方には無いのであります。是等は我朝廷の令を定められました時には餘程意を用ゐられたものであると思はれるのであります。逆も今日などの單に學術試験さへ及第すれば何處にでも這入れるといふのは餘程奈良朝時代は違つたものであります。是等は一層面白き意味があるやうに思ふのでございます。でありますから官制の上から考へましても、其他斯ういふやうな選叙等の上から考へましても始終日本といふことを意識されて出來たものであつて、決して外來の文化を其儘に採つて來たものでないといふことを證據立てることが出來る實證であらうと思ふのであります。

偕て私が主として申上げたいのは、老子のことでございまして、支那の方では老子といふものは、唐代には非常に尊重されたものであります。尊重された理由は斯ういふ所から來て居るのであります。丁度老子の姓といふものは御承知の通り李といふ姓でありまして、而して唐の天子の姓も李でありますから、詰り老子は唐の祖先であるご當時の道教者が申したものであらうと思ひますが、さういふ所から老子といふものに向つては大いに尊敬を拂ひ天子の稱號を贈つて玄元皇帝と申し、其人を尊重するのみならず其著書たる老子經も尊重することになつたのであります。それで高宗の時にありますと總て明經

進士の試験には老子を試験する、玄宗になりなると明經進士の必修科に定めたのであります。それのみならず玄宗は老子の註譯を書いて世に發布して家々一本を藏して讀ませることなどをして居ります。それから後には老子學を修める大學が出来たのです。大凡定員百人を養成する所の崇玄學といふ學校が出来て居るといふ譯で實に唐の高宗から玄宗に至るまでの時代の老子を尊重することは至れり盡したものであります。唐代には斯んなに盛んに行はれて居りますものを日本の方では殆どそれを顧みず知らざるものゝ如くして居るのはどういふ譯であるか、公羊傳穀梁傳は平安朝に至つて經書の中に加へることになつたのであります。老子は終に正科の中に入れられなかつたのであります。勿論個人としては讀むけれども國家が公に認めた書物とはなつて居なかつたのであります。是はどうして斯ういふことになつて居つたかといふと、どうも老子の學問は虛無といふことを唱へ自然といふことを主張しまして仁義であるとか道徳であるとかを非常に排斥し社會の秩序といふものを無視した所がある。語を換へて申して見ますと破壞的議論が多いのです。老子の説といふものは見ように依ては過激の破壞論ともなるのであります。斯ういふ過激の破壞論は到底當時儒教を以て我國固有の思想を補助して居る時代には相容るべからざる所のものである。さういふ考の所からして終に老子といふものを大學の正科に入れてはいけないといふ所に當時の人が考へ及ぼしたものではありませんかと思ひます。詰り我國體とは到底並立すべからざる主義である、だから是は入れてはいかない、斯ういふ所から來て居ると思ふのであります。それは

既に當時の人がいつて居るのであります。丁度奈良朝時代には對策といふことが行はれ、人を試験するの
に朝廷から問題を出すのが策問と申し、其策問に對して答へるのが對策であります。嘗て孔子の教と
老子の學と違ふかどうかいふ策問を提出されたことがあるのであります。其時に葛井廣成といふ人が
對策して居りますが、其結論とも見るべき一節を挙げますと左の通であります。

玄以獨善爲宗、無愛敬之心、棄父背君、儒以兼濟爲本、別尊卑之序、致身盡命。

玄は獨善を以て宗と爲す、玄といふのは老子のことをいふので、老子の主義は自分一個人だけを善くし
て人を愛敬するの心は無く、父を棄て君に背くやうな不都合極まるものである。儒はどうか、孔子の教
は兼ね濟ふを根本として而かも階級秩序が立つて居る、自分の一身を致し生命を抛ちて君國の爲に盡す
といふことがある。是が老子と孔子の教と異なつて居る所であるといふのである。是は廣成ばかりでは
ないのであります。今一人の學者の對策もあります。それは下蟲麻呂といふ人でありましたが、此人の對
策も廣成と同じやうに老子の方は自分ばかりを全うする個人主義であり儒教の方は兼濟であるといふや
うなことをいつて居るのであります。此二人の對策は當時の上流知識階級を代表した思想であらうと思
ふのであります。而して此思想が今の中に老子を退けた所以であらうと考へるのであります。でありま
するから私はどうしても當時の上流知識階級が新文化に接しまして決して摸擬であるとか或は翻譯的
であるとかいふやうな、我國の本領を忘れて居るやうなことは斷じてしなかつたものであるといふことを

いひたいのであります。即ち是が實例とすることが出来ると思ふのです。今一つ是と關係して居りますから申上げて見たいと思ひますが、吉備眞備といふ人が私教類聚といふものを書いて居りますが、それは惜しいことには本文が無くなつてしまつたつて目録だけ遺つて居ります。それは色々簡條があつて三十八箇條ばかりあります。忠孝を尊崇すべきことか、或は衛生のことで飲食を慎むべきことか、身の行を慎むべきことか、それから文を勉むべきことか、或は弓矢を知らなければならぬといふやうな標題であります。其第三條に「仙道不用」といふことがある。仙道といふことは何のことであらうか、それは本文がありません。仙道といふことは古の時分から起つて居りますが、南北朝時代には立派な道教の形が出来まして、殊に唐の時代は最も盛んなものであつたのであります。前申しました通りに老子は道教の祖師で而かも唐の帝王の祖先であるといふ所から餘程當時の人心をして道教の信念を深からしめました、さういふ關係から唐代には道教が盛んに行はれたのであります。吉備眞備は長く唐に行つて居りました親しく道教の隆盛の状を見て居るのでありますから日本に歸つて廣げぬまでも其話だけでもどんくする位に新しがるべき所がある筈である。然るに眞備が仙道は不用のことゝいつて道教の不用なことを書いて居る所に餘程意味があるのではないか、勿論道教といふものは老子を祖師にして居りまするけれども佛教の釋迦に於ける基督教の基督に於けることは餘程違ふのであります。道教そのものは能

く分拆して見ますと、種々の分子が輻輳して一つの道教といふものが混成的に出来て居るのでありますけれども、兎に角老子といふものを祖先に取つて居るのでありますからして老子は日本の國俗民情と相容れない、老子は日本に入るべきものでないと、斯ういふ所から仙道不用といふことを述べて來たのではないかと思ふのであります。當時に唐に行はれた道教といふものが獨立教として日本に傳はつて居らぬに就ては國史を研究する者若くは宗教の方面を専攻する者の問題としてゐる處であります。また明瞭なる解答を與へられて居ないやうであります。自分の考では、我國に於ける佛教の關係が一の原因を成し、今一つは國家に不適であるといふ當時の人の考が詰り老子といふものを正科に探らぬと同一の意味を以て道教に對して居つたのであらう、少くとも此二つが日本に獨立せる道教の起らなかつた原由であらうと思ふのであります。要するに斯ういふ次第で決して支那に行はれたから之を探るといふことにならなかつたことは是れだけでも分るのであります。是は學術上から申しましたのであります。今度はまだ一つ思想の上から御話をしたいと思ひます。餘程時間が過ぎましたが、もう暫くどうぞ……………

第四は思想上に於てといふのであります。推古朝からして王朝時代に至る間の思想は我國固有の國民性といふものが本になつて之に加ふるに儒教と佛教とを以てして居るといふことはいふまでもないことでありませんが、爰に一種の新しい思想が此間に日本に來て居りはしないかと思ふのは外でもない、清談的思想であります。後漢の時分は餘程名譽であるとか氣節であるとかいふものを非常に尊重しまして、

日本の徳川時代に於ける武士若くは俠客といふ氣風が非常に行はれたのであります。身を殺して仁を成すといふことも獨り君の爲めのみならず朋友の爲にもあつたことで實に面白い思想が後漢時代に行はれた。さういふ名節を尊ぶ思想が三國の魏晉頃になると一變してしまつて餘程輕佻浮薄な風俗になつてしまつて來たのであります。此輕佻浮薄の風俗になつて來る時に當つて行はれたのは清談であります。清談は清言とも申しますが、清談といふのはどういふことをするかといふと、世俗を離れて清新奇警なる談辯を弄するのを清談といつて居るのであります。實は後漢の末頃から名節を尙ぶ風がありましたけれども、一面には清談といふことも既に起つて來て魏晉時代に盛んになるのであります。其清談は眞面目なものもありますけれども、洒落に類似したやうな苦くは禪宗の問答然としたものもあり、中にはなか／＼面白いものがあります。劉義慶の世説と其劉孝標の注とを見ますと魏晉南北朝時代の清談が残つて居ります。其中の一つ二つを申します。阮瞻といふ人が王戎といふ人に尋ねて老子の教と孔子の教と違ふかどうかといつた。さうすると王戎は、

將 無 同

の三字で答へて居る。將は「ベシ」とも、「ハタ」とも訓し、將無同の三字が「同ジキコトナカルベシ」とも、「ハタ同ジキコトナカラシヤ」とも讀まれ、前者の讀方とすれば、違ふであらうといふことになり、後者の讀方とすれば、同じいといふことになる、三字で此の兩意義が含まれてゐるから清談として名

言とせられてゐるのであります。此時阮瞻深く感心して自分の屬官たる様にしたのであります。それゆへ當時王戎の事を三語ノ椽と申しました。禪宗の問答に似た一例を申しますと、鄧艾といふ人は餘程口が吃るのです。自分の名をいふに艾々と二度づゝいふのです。すると晋の文王即司馬昭が戯れに、あなたは艾々と仰しやるが艾は何人居るのですかといつた時に、鄧艾の答へたことは、

風兮風兮、故是一風。

是はごういふことかごいふことと楚の狂接輿といふ者が孔子に向つて孔子を鳳凰に見たてまして、「風兮風兮何徳之衰」といつたことがありますから風や鳳やと二度いつても一つの風を指したものである。自分の艾々といふのも一人の艾であるといふことをかく申したので是も清談の中の名高い話であります。詰り清談といふものはさういふものであります。ところが清談をやる者の行儀といふものは驚くべき放肆なものであります。殊に恐るべき思想が此間に含まれて來るのであります。世間のことはまるで投げ棄て唯もう遊暮して道徳は非常に輕んじ、禮儀廉恥などいふものは卑しみました、勉強などをする人を捉へて迂濶な人間であるといひ、甚だしきに至ると眞裸体になつて酒を飲み、それが風流とか通達であるとか、いふやうな始末、實に無作法不行儀何とも此處で申上げられぬ位のひどいことをやつて居るのであります。それで當時さういふことをやるのは誰かといふと、彼の有名な竹林の七賢の人々です。王戎であるとか嵇康であるとかいふ人は皆其種類の人物であります。就中一番其中の代表的ともいふべ

き人は阮籍であります。當時士大夫から非常に慕はれ、競うて此人の風を真似るといふことであつた。此人は髪は散らし帽子は附けず真裸体で酒を飲み、母を喪つても悲しむことなく泣くといふことがない、唯酒を飲んで暮すといふ、實に不道徳を極めたものであります。而して此人の思想なり此人の理想といふものは其作つた文章で見ることが出来るのでありまして、達莊論といふものを書いて居りますが餘程莊子を重んじた、勿論莊子ばかりでなく老子をも非常に尊崇したのであります。達莊論の外に大人先生傳といふものがありますが、それは大人先生といふ人を藉つて自分の理想として居る人を大人先生として書いた文であります。其文中の極ひどい所だけ申しますと斯ういふことが書いてあります。

○汝君子之處區内、亦何異夫武之處禪中乎。

○蓋無君而庶物定、無臣而萬事理。

○君立而虐興、臣設而賊生、坐制禮法束縛下民。

○夫無貴則賤者不怨、無富則貧者不爭。

○汝君子之禮法。誠天下殘賊亂危死亡之術耳。

君子といふのは儒敎主義の人を指したのであります、汝君子の世間に居るは、まるで武が禪中に居ると違ひがない、實に君子といふものは役に立たぬものであるといふことである、随分甚しい罵詈である。其次からは最もひどい、蓋し君無くして庶物定まる、臣無くして萬事理まる、其次が一体一國に主權者、

君主などが出来るから暴虐の政治が興る、それから役人などを設けるから賊が生じて来る。さうして坐ながらに令規であるとか法律であるとかいふものを拵へて下民を束縛するといふ、此二箇條は無君無臣の主張で全然今日の無政府主義と揆を一にして居るのであります。實にひどい思想を有つて居つたのであります。それから貴きなければ則ち賤しき者怨まず、富なければ貧しき者争はず、貴い者がなければ賤しい者が怨むといふことはない、富む者がなかつたら貧者といふものは争ふ筈がない、是は今日の所謂一派の社會主義者の理想とする所に近いものであります。斯ういふことを述べて居るのであります。夫れから又學者を罵詈して汝君子の禮法は誠に天下殘賊亂危死亡の術のみと極言してゐます。今日の語で申しますと、阮籍は過激な危険思想を抱いて居つたものであります。而して此過激な危険思想を抱いて居る阮籍が當時の士大夫から真似られて居つたのでありますから、斯ういふ人が澤山あつて一つの流れを成して居つた譯であります。魏晉の時代に至つては斯ういふ思想が非常に勢力を得たからして儒教主義も大いに衰へ道徳も地に墜ち全く清談者の爲に國家の秩序といふものが破壊されて來たのであります。それでありまして帝室の一族の間に八王の亂などが起りまするし、骨肉の相争ふ隙に乗じて西北方に居る五胡の種族が起つて來て遂に晉の朝廷が土崩瓦解するといふ恐しい結果を齎したのであります。是までが即ち魏晉の時代に於ける清談的思想があつたといふ御話でありますが、ところで此思想が日本へ來て居はしなかつたかといふと、どうも這入つて居つたのであります。それはどうして分るかとい

ふと、當時の詩歌文章で證明されます。奈良朝時代の詩を集めました懷風藻といふ詩集があります、
其中の藤原麻呂の詩の序に、

千歳之間。善康我友。一斛之飲。伯倫吾師。

といふ語があります。善康も伯倫も竹林の七賢中の人ですが、それを取つて來て我が友であるとか吾が師であるとかいつて居る。是は全く風流に託していつたので、恐らくは深入りはしてゐないであらうと思はれますが、兎に角斯ういふことをいつて居る。又藤原麻呂の詩に、

城市元無好。林園賞有餘。寄言禮法士。知我有鹿疎。

と詠じてゐます。禮法といふのは阮籍あたりのいふ禮法です。兎に角清談者流の幾分の餘風を有つて居るといふことは争はれない事であります。懷風藻に左の如き詩もあります。

述 懷

越 智 廣 臣

文藻我所難。老莊我所好。行年已過半。今更爲何勞。

是は老莊主義で世を終つたが宜いといふのである。是は純粹な清談的思想であります。萬葉集の歌にも此思想を含んだものがあります。

心をし、無何有の郷に、おきてあらば、藐姑射の山を、見まく近けむ。

無何有の郷といふのは即ち虛無自然の境といふ意味で藐姑射の山といふのは仙人の居る所である。此歌

の意は若し虚無自然の境界に於てあつたならば仙人の居る藐姑射の山なども目前に近く見ることが出来るだらうといふのであります。

讚酒歌

大 伴 旅 人

なかなか人にあらずは、酒壺に、なりてしがも、酒にしみなむ。

酒壺になつて酒に浸みて居つたら宜からうといふ酒好きなことを言現はして居るのであります。是は魏晋時代の清談家の一人に遺言をして死んだ者がある。自分は酒壺を拵へる焼物師の家の近邊に葬つて貰ひたい、化して土となつて幸に収られたならば酒壺になれるからと遺言をした人がある、此旅人の歌はこの遺言者の思想を受けたものである。

古の、七賢、人たちも、ほりせしものは、酒にしあるらし

是も旅人の讚酒歌の一つであります、斯ういふことをいつたのは清談的思想の歌に現れたものであると思ひます。山上憶良は萬葉の作者中で最も漢文學に深く歌に卓絶した人でありまして折に觸れて儒教思想を詠み、盛んに名教道徳を鼓吹してゐます。萬葉集に此人の歌が多くございますが、其歌の中に谷反感情歌といふ長い歌があります。其歌の憶良の序文に、

谷反感情歌一首並序

或有人、知敬父母、忘於侍養、不顧妻子、輕於脫履、自稱畏俗先生。意氣雖揚青雲之上、身体猶在塵

俗之中。未_レ驗修行得道之聖、蓋是亡命山澤之民。所以指示三綱、更開五教、遺之以歌、令反其惑。とあります。本居宣長の説に此の知敬父母の知の上に、打消の不の字が落ちて居るのであるといつて居る、鹿持稚澄の説では知の字が不の字の誤であるといつてゐますが、鹿持の説が宜しいやうに思はれます。又畏俗の先生の畏の字は宣長の説では異の字の誤りで異俗とは俗に異なる義に取つたものとするのである。一つの本には離俗に作つたのもあるさうですが、是は異俗の方が宜しいと思ひます。兎に角異俗先生と稱する者は父母を敬せず、妻子を顧みず、老莊思想の虛無界に心を寄せ其意氣は青雲の上に揚るけれども、身は塵俗の中に居つて未だ修行得道の聖を知らない、蓋し山澤に亡命した民である、斯ういふひどい人物だから三綱の道を示し更に五倫の教を開かため歌を贈りて警告し、其道に惑へるを諭して本情に立ち反らしめんとの意味であります。其歌の大意は斯ういふことになつて居るのであります。人には五倫の道がある、到底妻子を捨て君父を絶ち若くは兄弟を置去りにして行くといふことでは立行くべきものでないから、宜しく人は人道を盡して家業を勵むやうにしなければならぬといふことが大意であります。是は全く憶良が自分の平生主張する所の儒教主義を發揮したものではありませんが、憶良が警告を與へた異俗先生とは抑々何人であるか、或は彼の誤れる清談者流の説に依て自ら異俗先生など稱して居る輩が實際にあつたのではあらう、其人物が非常に禮法を無視したり或は名教を蔑ろにしてさうして君臣もなければ親子もないといふ考を抱いて居つたから、そこで憶良が斯の如き三

綱を指示して五教を開くといふやうな此歌を作つた譯であつて、異俗先生などいふことは阮籍の大人先生傳を見て喜ぶ所があつて自分で斯ういふ名稱を附けたものであるかのやうに考へられるのであります。して見るとどうも日本に阮籍一派の清談家の恐るべき危険思想が既に這入つて來て居つたものである、けれども我國民の國民詰り憶良の如きも其一人であります、斯ういふ上流知識階級の人に於ては大いに考へる所がありますからして、そこで斯ういふものを頻りに叩潰して參りました。此事も叩潰した一つの例でありまして

神仙非存意、廣濟是攸同。

調の老人の作つた詩の二句であります。神仙は意の存する所でなくて廣く世人を濟ふといふことは、他の人々と同じくする所であるとの意を述べたものあります。詰り清談的思想を排斥して儒教主義を唱へた例になるであらうと思ふのであります。斯ういふやうに自覺があつた爲に清談的思想も行はれずして止んだのである。是が即ち思想上に於ける自覺の實例として擧ぐべきものであらうと思ふのであります。今や歐洲大戰の後を承け世の中の趨勢が變化して來て、思潮なども愈々險惡に傾きつゝあるのであります。それが我日本にも段々及ばして來るのが猶奈良朝時代に或一部の清談的思想の這入つて來た時よりも、より以上でありますから、自分等も自覺の歴史を餘程深く考へて行かなければならぬと竊かに思つて居るのであります。さういふことを思ふに就てそれで斯ういふ題を出しまして御批評を仰ぎたいと思つ

たのであります。全く有りふれた御話をして時間を取りまして、而かも話に殆ど秩序がなかつたに就ては御詫を致します。(拍手)

伊勢皇大神宮に詣でて詠める

五十鈴川我が妄念をそよぎけり

庸也

祈の聲は神に通はむ

神路山雨に煙りてすがくし

ぬかつく我れに花の散りくる